
手を伸ばして、空振り仰いで

リユーレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手を伸ばして、空振り仰いで

【Nコード】

N2142BA

【作者名】

リユール

【あらすじ】

ドラゴンクエスト8の物語。なるべく本編どおりにします。

ほかのドラクエの呪文はたまにでてくるのでご注意を。

主人公の性格がころころ変わるのはわざとです。そういう性格です。

プロローグ（前書き）

更新は不定期で短いのを注意して読んでください。

プロローグ

カタカタカタ・・・。

しいんとした静かな中。

馬車の行くかすかな音とたまに聞こえる鳥の鳴き声のほかは何も聞えやしない静かなでも悲しみに満ちた空間。トロデーン領の端っこ、橋の近く。そこにいた、数名の人間がのちの世に語られることになるとはだれも知らなかったし本人たちも思おうとしなかった。そこにいたのは呪われし王と呪われし姫。そして唯一呪いを受けなかった若き近衛兵の青年と元山賊の男だった。

そのみょうちきりんな人々はある、呪われし城を救う為、わが身を犯す呪いを解くために旅を始めたばかりだった。

まだ実戦経験のほとんどなさそうな若い近衛兵と元山賊だけが城ひとつ救うのはとてもじゃないが無理・・・不可能だがその時はだれもそのことを心配してはいなかった。

というよりも心配するだけの余裕がなかったのだ。

しかし誰が考えただろう。

結果世界を救った勇者生ご一行の戦闘要員が世界を救うたった3年前まではスライムでさえ苦戦していたなんて。

事実スライム3匹倒すのに戦闘時間30分・・・。
はつきりいって弱すぎだった。

まあその近衛の青年が瞬く間に呪文を使えるようになり遠出できるようになってからはそんなに「弱すぎ」というほどではなくなったのだがそれでも弱かった。

強くなれたのは仲間がいて、城のみんなを助けようとする気持ちが

大きかったからなれたのだ、そのちに勇者の青年は言った・・・

プロローグ（後書き）

どうでした？めざしているほどいい文章は書けないけど生暖かい目で見て頂ければ嬉しいです。

トラペッタ リーダーは迷子症

ガラガラガラ・・・

トラペッタの町の大きな門が開く。

中に入ったのははた目には2人と2匹・事実5人（トールを含む）。

実質45%が呪われているのはさておき。

元山賊のヤングス以外まったく言っていないほど他の町に行ったことのないものだからトロデ王の言うとおりのマスター・ライラスを探しだすのはいつの事やらわからなかった。

※ヤングス視点

あっしのまえを歩きなすっているのがあっしの兄貴でガス。

あの緑のおっさんの言った通りこの町の賢者と呼ばれる「マスター・ライラス」を探すでガス。

いま兄貴には失礼何でガスがここは10〜回は通ったところでガス。
・・・迷ったでガスか・・・？

※主人公アーシュ視点

いやなに！これ・・・。

トラペッタに付いたはいいいけど。

これはこれは。

ー迷う・・・。

どうしよう。

そういえば10何年もいるのにまえもうん、5日前もトロデーンで迷ったなあ。

前後輩に言われたなあ・・・
先輩の迷いぶりは、トロデー名物だって。
あああへこむ・・・

迷いに迷った挙句、アーシュはしゃがみこんだ。
というかうなだれた。

まさにもう誰が見ても立派な迷子。

なんかアーシュの周りだけさんと照る太陽が遠慮しているみたいに暗くなった。
ホントに。

「あ、あにきい」

この迷子には何も言うなよ。

のちにクールと言うバカリスマの残した名台詞である・・・

トラペツタ リーダーは迷子症（後書き）

いきなりギャグです。

やっぱり生暖かい目で見守っていただくのが一番のようですね・・・
あははは・・・

登場人物

主人公 アーシュ

性格 ころころ変わる超多重人格。普段は優しいお人よし。戦闘中も変わらない。

武器 普段はブーメランや槍。ボス戦やメタル系には剣を使う。

得意技 火炎切り ベホマズン（終盤） ドラゴン切り

好きなもの 本。読みつづけたら止まらない。トロデーンの図書室には連れて行かないということがトロデーンの民の義務でもあるが・
・・？

変わり者の近衛兵。トープを家族と言い張る。トロデーンの城壁を素手で5分で登り切った超力持ち。剣は技より叩ききる主義。アーシュと言うのはミーティア姫が付けた名前で元々の名前はアミア。アミアは一応正式な名前とされている（アーシュはあだ名に近い）。

ヤングス

性格 情に厚い。優しい。戦闘を超真面目に取り組む人。

武器 普段はオノ。たまに鎌。

得意技 かぶとわり かまいたち

好きなもの 兄貴（人では）

つぼ。（たるは遠慮しない）ヤングスは絶対に割らない。

情に厚い元山賊。

登場人物（後書き）

残りは後程更新します。

トラペッタ2 つっこみ役はストレス満載

迷いに迷ってとうとうしゃがみこんだアーシュをつれてヤンガスは町の二階部分に上がった。

「え、階段あったの・・・？」

5回は前を通ったのに気が付かなかったアーシュがつぶやいた。少し元気が戻ったアーシュは階段の途中で振り返った。

「うんうん、ここから見てる限りでは迷わなそう・・・！！！」

と、いきなり階段を駆け下りた。と言うより飛び降りた。スライムしか倒したことのない真新しい剣を抜き放ちながら。

その剣を抜き放つときにおこった風が石を投げようとした男の服を切り裂いた。

ダン、と石畳の上に着地すると100メートルほど先にいる男に剣で一閃。

しりもちをついたそいつを無視して迷いなくそこへ走った。いくつかの石を投げられた王と姫のもとへ。

「大丈夫ですか?!」

蔑みの目でこちらを見る人々に思いつきり剣で威嚇しながら言う。

「大丈夫なわけがなからう！こんな街には居られんわ！行くぞ、アミア！」

遅れてやってきたヤンガスと共に最後まで剣で集まる人々に威嚇を続けていた・・・。

「・・・・・・・・。」

ものすごく機嫌の悪い、と言うか切れる寸前のアーシュにおずおずと空気を和ませようとヤンガスが聞いた。

「あ、あの・・・アミアって言うのは誰でガスか・・・・・・・・？」

「ぼく。」

機嫌が悪いのは変わらなかった。

「ぼくさ、よほどのことがない限りあの町を呪うね。」

これこそ、トロデーン並みに呪うね。

特に僕が服めった切りにしたやつ。」

さっきまでの迷子になっておろおろとしていた姿はどこへやら、心なしか目が光っているように見えるほど怒っているアーシュはいい切った。

「・・・・・・」

リアクションに困ったヤンガスは固まってしまった。

トラペツタ2 つっこみ役はストレス満載（後書き）

短いですが・・・

これがアーシュ・アミアの性格です。

怒りかけ、怒った時が恐ろしい力を発揮します。

フィールド1 最初の性格激変（前書き）

毎度のことですがものすごく短いです・・・

フィールド1 最初の性格激変

※魔物たちからの視点

今は動いちゃだめだ、動いたらニンゲンの戦闘狂に殺される・・・
機嫌の悪すぎるアーシュが魔物と言う魔物を見た瞬間に瞬殺して
るのでそうどの魔物たちも思った。

まあ瞬殺されていない魔物は居るには居るけれど。

それは魔物たちにとってはあんまりいいやつじゃない、つまり人に
危害を加えない魔物たち。

まあほとんどの魔物はカチンと氷ごとく固まっていた。

※トロデ王視点

いやいったいこやつのどこにこんな力があるのかのう。

前から年齢の割に力が強いということと姫の推薦によって近衛兵じ
ゃったがここまでの力があるとは思わなかった。

元に戻ったら研究してもらおう価値があるかもしれん。

しかし100メートル先の人の服を切り裂くとはいやはやはわが家臣
で良かったわい。敵だったらもう恐ろしいことよ・・・。

そう思いつつそんなに丈夫じゃないが折れるまで使うのは難しいで
あろう兵士の剣が酷使しすぎでぼきりと折れたときはどうしようか、
と思うトロデだった。

「もうこの町にはマスター・ライラスもおらぬし、ひどい目にあっ
た。もういくぞい！」

はい、とうなずくアーシュは一番先に踵を返して歩き出そうとした。

「お待ちください！」

その声がかかる前までは。

「？」

頭にはてな印を浮かべながら振り返るとそこにいたのは一人の少女だった。

「こんなひどいことをしてしまった町の者ですが、どうかお待ちになつて、話を聴いて下さい・・・！」

フィールド1 最初の性格激変（後書き）

トロデ王の話し方が分かりません・・・。

フィールド2　ぼくだって全員恨むの嫌だけどね。

「ええーと、どちら様ですか？」

魔物もすぐむ怖い雰囲気だったアーシュが普段通りに返事を返した。

「占い師ルイネロの娘、ユリマです。」

あの、あんなひどいことをした、町の者ですがあなたたちが夢に出てきたのです……。

予知夢のようでした。

人でも魔物でもない者が私の願いをかなえてくれる、と。」

この時間に町の外へ出るのは町の娘では自殺行為に近いことだった。それなのにアーシュ達を追いかけて外に出るほどのことか、とよく話を聴いた。

ユリマの話では、父のルイネロの今まで占いでぴたりと探し物が見つかっていたのにいつの頃から占いが当たらなくなってしまい、毎日酒に明け暮れるようになってしまったということ。

ユリマが考えるには占いに使う水晶がただのガラス玉にすり替わっているらしい、と。

と、トロデが叫んだ。

「え、えらい！！」

耳がキーンとして思わずしゃがみこみそうになりながらもひきつった笑顔でアーシュは引き受けた。

「ユリマさんの予知夢では場所はわかったんですか？」

そう尋ねるとユリマははい、と答えた。

「ここから先、道なりに行くと滝があります。そこに洞窟があって、その中にあるそうです。」

それからなんだかんだ言っただけ嫌ってた町にもかかわず、アーシュ達は町の宿に泊まった。

フィールド2 ぼくだって全員恨むの嫌だけどね。 (後書き)

とてつもなく短い小説しか書けなくてすみません・・・

トラペッタ3 こやつに本を読ませるでないぞ！

しまった、遅かったか・・・？

ずるずると引つ張られながらこちらへ向かってくるアーシユを見てトロデはため息をついた。

朝ごはんを運んできたときヤンガスがアーシユを通して呼んだのだが、すでに時は遅し。

すでにアーシユは辞書3冊分はあるような分厚い本を読んでいた。

「あ、兄貴いゝ。」

見捨てられた子犬みたいな感じのヤンガスが何度呼ぼうが、トロデが大声で叱ろうが、姫がいななこうが、持ち主が返せと言おうがまったく聞こえていない。

「こやつに本を読ませるでない、とおぬしに言おうと呼んだら、か・・・。」

ちなみにさっき挙げた以上の邪魔をするとこのトラペッタで申し訳ないほどのクレーターができるだろう。申し訳ないというレベル的にはトロデの受けた仕打ちこみの事である。

「これから旅はおそらく長いじやろうが、いいか？決してこやつを本と言う言葉や本のあるところに近づけてはならんぞ。これは我がトロデーンの民の義務でもある。

こやつが動き出すまで、おそらく三日。・・・。」

はあ、と3人そろってため息をついた。

ついでに言うところの本はヤンガスが尋ねるちよつと前から読みだしたものだそうだ。

先は長い・・・。

トラペッタ3 こやつに本を読ませるでないぞ! (後書き)

知っていますよね?

リブルアーチで魔道書探すイベント。

どうなるのやら私にもわかりません・・・。

トラペツタ4 待ちぼうけな人と暴走する人と。(前書き)

短かっと思う私の小説。

読んで下さる人には、感謝の気持ちでいっぱいです。

トラペッタ4 待ちぼうけな人と暴走する人と。

トロデの推定では3日。

ずっと待たなくではいけない。

しいんとして、息をするかすかの音しかたてないアーシユの目は超真剣。

何の本かちら、とさっき覗いたところ、それは「初級回復呪文魔道書」だった。

この世界ではレベルアップすると、呪文を覚えることや、スキルを得て、特技や呪文を覚えたりすることが出来る。

しかし事前にどの様な効果を持つてるか、どういう名前か、どの様にして使うかを知らなくては素質を持っても使えない。

だから魔道書や特技の使用法を書いてある本を読むことは大切だ。初級回復呪文魔道書ではホイミ、キアリー、キアリクの使用法がのっている。

しかしもとの「素質」がなければその魔道書をどんなに読もうとも覚えることが出来ない、と言うのがこの世界の常識。

以外にもホイミはヤンガスにも使えるそうだが、いまだ彼は信じていないが。

しかし普通の魔道書よりも分厚いな、と思い少々無遠慮だと思いがらもう一度表紙を見た。

さっきのは半分ヤンガスの勘違いだった。本のタイトルは「初級回復呪文魔道書」ではなく「初級回復呪文魔道書、中級回復呪文魔道書、上級回復呪文魔道書、特級回復呪文魔道書」だった。

この魔道書にはすべての回復呪文がのっているらしい。

まだまだこの無意味な日々のピリオドを打つ日は遠い・・・
ヤンガスはため息をつきながら、トロデーンの人々にとても強く同情した。

トラペツタ4 待ちぼうけな人と暴走する人と。(後書き)

ちよつと改造入った気が・・・

滝の洞窟1（前書き）

飛びましたが・・・

滝の洞窟1

ぴちよん、ぴちよん・・・

滝が流れる洞窟だけあって水の音が絶えず聞こえる。

ぴちよん、ぴちよん・・・

松明を持ったアーシュが宝箱から手に入れた地図を見ながらううん、と困っていた。

「ヤングス・・・」

とうとうアーシュはお手上げ、とばかりに地図を渡した。

「お願いしてもいい？ ぼくさ、地図どおり進んでも迷うんだよね。良く迷ったよ・・・」

「・・・」

ちよつとどころじやない方向音痴加減に困ったように言った。

「分かったでガス。」

それから魔物と遭遇するほかは大した障害もなく進んだ。

親切なスライムのお蔭で銅の剣も手に入れた。

ぴちよん、ぴちよん・・・

静かな洞窟にはかすかな水滴の垂れる音しかない。

おおきな立派な扉があったらしい残骸の所まで進むとそこにはおおきずちと言う魔物がいた。

ぶち抜いてある扉をとうせんぼするように。

「良かったあ、あの扉が開いててさ。」

お気楽にそういい、おおきずちの前でアーシュは止まった。

「うん、君何してるの？」

「ここを通りたかったら俺様を倒してからにするんだ・・・な！
！！！！」

倒してから、まで言ったところでアーシュはにっこり笑うと軽くおおきずちを蹴った。

軽く手加減をしているので、おおきずちは転んだ。見方によっては倒れた。

「倒したよ、通っていい？」

今度はちよっぴり黒い笑顔で。

「はいいいいいいい！」

そういうとおおきずちは逃げ出した！

「メタスラだったら僕逃がさないのにね、ヤンガス。」

「・・・そ、それでガスね！」

滝の洞窟1（後書き）

アーシュの今回の性格パターン「お気楽」「ちょい黒」「普通の子供」でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2142ba/>

手を伸ばして、空振り仰いで

2012年1月12日20時58分発行